

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2691600106		
法人名	医療法人亀岡病院		
事業所名	医療法人亀岡病院 けやきグループホーム		
所在地	京都府亀岡市追分町八ノ坪43-8		
自己評価作成日	令和4年2月25日	評価結果市町村受理日	令和4年4月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&jiyosyoCd=2691600106-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1「ひと・まち交流館 京都」1階
訪問調査日	令和4年3月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

法人の理念である「高い技術と温かい心を持って、医療・介護を提供し、地域社会の発展に貢献します」を基本的な考え方として、一人一人の生活を尊重し、いつまでも心豊かな暮らしが行えるよう援助しています。事業所に看護師を配置し、運営法人である亀岡病院との密接な連携により、日常の体調管理や急変時の迅速な対応が可能となっています。入退院時の調整も円滑に出来るので入院期間も短く、退院後も安心してグループホームで暮らしていただけます。認知症介護実践者研修を常勤職員は終了しており、認知症の専門的なケアの実践に向け、日々努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

JR亀岡駅から徒歩8分の介護複合施設の2階に定員9名のけやきグループホームがあります。平成27年5月にショートステイの事業所を転用して開設され、母体の亀岡病院や介護医療院との緊密連携のもとで入居者や家族は安心して過ごせています。事業所内には格子戸や木目調の腰板や床、畳の間などがあり、和風調の落ち着いた家庭的な温かさが漂います。コロナ禍で多くの制約を受けつつも、入居者の想いを最優先し、運動会など内々の行事にも工夫を凝らし、棒サッカー、パン食い競争などの企画で入居者が本当に楽しんでいただけたか事後に反省し、その都度改善点を確認しています。時にはケーキや蒸しパン等のおやつ作りを楽しみ、気候の良い時にはコスモス園や平の沢池、八木方面へドライブに出かけたりもします。入居者それぞれの持ち味を発揮し、確かな技術と知識を持った職員とともに日々ゆったりと過ごすことができ、望めば最期の時まで寄り添ってもらえる、頼れる事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業者内に法人理念、事業所の理念を掲示し、研修等で理念の浸透、共有を図っている。	法人理念に基づき作成した「一人一人の生活を尊重し いつまでも心豊かな暮らしが行えるよう 介護、医療を提供します」の事業所理念は廊下の掲示板に大きく掲げ、入職時と4月の倫理勉強会の時などに再度周知徹底を図り、思いを新たにして日々の実践に取り入れている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	現在は新型コロナウイルスの蔓延の為交流が絶たれている現状である。	地域のボランティア団体であるアナウンス研究会を介し、朗読、歌、ハーモニカ、太鼓等のボランティアが来所され入居者を楽しませてくれていたが、コロナ禍により現在中断している。町内会には入っていないが、町内会の副会長が事業所を気にかけてくれている。地元の馴染みの老舗から時々行事食や弁当などをとって地域との関係継続を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	機関誌などを地域に回覧しているが、新型コロナウイルスの蔓延もあり地域貢献が進めることが出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルスの蔓延等でほぼ開催できていない。文書の配布により事業所の取り組みなどは報告している。	運営推進会議はしんまち小規模多機能ホームと合同開催し、対面の場合は市や地域包括支援センター職員、町内会副会長などの参加のもとで、防災面での協力体制や、コロナ禍での面会方法に関する協議などを行っている。このところほとんど対面での開催はできていないが、中止の場合は運営状況や行事、職員研修などの報告書を作成し、関係者や家族に配布している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に毎回参加して頂いている。機関誌の配布や事故報告、取り組みなどを伝えたり、わからないことがあると相談にのっていただいている。	行政関連の連絡会や研修は中止となったが、新型コロナ対策費やマスク・消毒液の支給、事故報告などで随時連絡を取っている。また、運営推進会議への市や地域包括支援センター職員の参加、書面開催の場合も含めた会議報告書の提出などでも関わりを持っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年2回の身体拘束の廃止に向けた研修を行い、身体拘束廃止委員会を設置。3ヶ月に1回会議を開催し、身体拘束廃止の取り組みを行っている。	「身体拘束廃止に関する指針」及びマニュアルを備え、3か月毎に身体拘束委員会を開催し、拘束事例・不適切言語などについて職員自ら振り返り、年2回の事例研修も実施している。不参加の職員は資料確認のサインをしている。玄関施錠は本来していないが、体温チェックや消毒面での必要、1階のデイスビスで帰宅願望の強い方が頻回出ていかれ、事業所前の交通量が多い事などにより、事務所が空くときは1階は施錠し、2階のグループホーム入口の施錠はしていない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待について勉強会を行い、高齢者の尊厳を守れる職員になることを目指して取り組みを継続している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	地域包括支援センターより権利擁護事業の情報提供をうけたり、入居者家族や入居相談より相談を受けた時に地域包括支援センターにつないだり、成年後見制度について情報交換している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に施設見学や費用等の説明を行い、事業所の役割や設備等の説明を行っている。契約時にも再度、書面を使用して説明を行い、契約を交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	オンライン面会やケアプラン等の説明時に意見や要望をお聞きしサービスに反映している。	利用者の希望は普段から聞き取り対応している。リモート面会の要望が家族から出て実現したが、やはり対面だという意見も根強く、新型コロナが下火の頃に再開したが、府の感染者増加で再度中止となった。運営推進会議では「事故・ヒヤリハット報告の開示」の要望があり、実現に向け取り組んでいる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回行っているチーム会議等で、個々のケアや業務改善について話し合っている。	会議以外にも随時職員意見を受け、改善に繋げている。1次評価者(リーダー)による職員面談と1次評価者と管理者との面談があり、組織的に意見を吸い上げるシステムがある。用具・設備の購入や改善、業務平準化のための業務内容の見直し、行事・入居者処遇、家庭の事情も考慮した勤務への配慮など多岐にわたる意見を聴取し働きやすい職場環境や職員の達成感を重視している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	介護職員処遇改善加算、介護職員特定処遇改善加算等を取得し、資格取得や継続勤務への意欲につなげている。きょうと福祉人材育成認証を受け、実践している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修計画を立て、OJT指導者の育成を行い個々のスキルアップにつなげている。京都福祉人材育成認証を取得した。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会に参加し、交流等を行っていたが新型コロナウイルス蔓延の為実施できていない。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前、入居後もご本人の生活歴や趣味などを発見していき、望まれている生活はどのようなものなのか常に探っています。入居者様の気持ちを引き出せるようコミュニケーションを取り関係作りをしています。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に聞き取りを行い、入居者様がグループホームでどの様に過ごされているかイメージでき安心できるようにコミュニケーションを取っています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の事前情報と入居後の入居者様の生活を適切に把握し、他のサービスや地域資源の利用なども考慮して必要な支援を提供するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に家事や掃除などをおこなっている。また、生活の中でそれぞれに役割を持って頂くことで生活の意欲の活性化につなげている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルスの蔓延の為、面会や外出、外泊等も制限している状態であるが、オンライン面会やガラス越し面会等を行い家族との絆を保てるよう努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔からの友人の面会等を行っていたが、新型コロナウイルスの蔓延の為実施できていない。	家族との面会は新型コロナの動向に注意して対面、リモート等その時の情勢に合った方法を用い、電話の取次ぎもしている。屋上菜園での野菜づくり、洗濯物干し・洗濯物畳みなど本人の得意なことを尊重して意欲が衰退しないよう留意している。縫物の得意な方の刺し子の布巾はキッチンで使っている。塗り絵が好きな方の作品はコンクールに出品している。地元の老舗の弁当や、焼き芋などの購入、ビューティーヘルパーに髪染めを頼みおしゃれ心を維持するなど過去の習慣の継続を支援している。職員は「ご利用状況報告書」の健康・生活・行事の欄に近況を記載し毎月家族に送っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	座席の配置や一人になれる場所の提供など適切な距離感で入居者様の関係性が保たれるよう配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了しても、同じ地域で行事や買い物等で顔を合わせることもあり、これまでのことや現在の関係者のご様子等をお聞きし関係性を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の今までの生活歴や情報から意向を把握している。入居後も言葉や行動の裏に隠れている意向を想像しみんなで話しながら入居者様の意向や思いに添える様努力している。	普段はサービス実施記録に食事・水分摂取、排泄状況や本人の様子や言動を記載し職員間で共有している。初回入居時の情報にその後の追加情報を加え、9人の入居者を3グループに分け、1グループを3人の職員が担当し、緻密な本人理解を積み重ねている。信頼関係が深まり攻撃的な言動が穏やかになった方がある。意思表示の少ない方は家族から本人の意向を詳しく聞き取っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人やご家族の他、入居前に関係を持っておられたケアマネや施設関係者等に担当者会議などを通してこれまでの暮らしの把握を行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	3カ月に1回、ケースカンファレンス、モニタリングを実施し、把握している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員を3チームに分け、各チームごとにケアカンファレンスを行い、計画書に反映している。家族の要望などは計画作成担当者がお会いした時などに伺っている。	各種記録を統合し、3人の担当職員が入居者3人のケアカンファレンスをおこない、3か月ごとに介護計画の実践状況をふり帰り、継続・中止・新規必要性を検討・記録している。それをもとに計画作成担当者がモニタリングとして纏め、6か月ごとの介護計画に反映させている。計画には介護医療院の理学療法士や看護師など多職種の関与が明示され、変化があれば6か月以内でも計画を変更する。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	支援記録に日々の様子を記録し、それを基にケース会議で個々のケアについて話し合い、計画書に反映している。また、チーム会議でも個別のケアについて話し合っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況に合わせて受診対応や入退院の支援、外出時の援助などを行っている。その他にもご本人やご家族の要望に対して柔軟な対応を心掛けている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	新型コロナウイルス蔓延の為実施は出来ない状況背ある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	亀岡病院の担当医により、月2回の訪問診療を受けている。看護師が立ち合い、普段の健康状態などを看護師に伝えている。また、状態の変化のある時は亀岡病院で受け入れる体制を確保している。	事業所の看護師と亀岡病院の医師・看護師が連携し入居者の医療情報を共有している。病気や怪我などの時の対応が素早いと家族からも好評である。亀岡病院への受診には事業所看護師が管理者が付き添い、他科受診は基本的に家族が付き添うが、家族が遠方の場合は管理者が通院支援をする。希望者は歯科往診を受ける事ができる。介護医療院の理学療法士が生活機能の確認と指導に定期的に来所する。看護師と管理者とで夜間オンコール体制を取り、24時間連絡がつくようにしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所に看護師を配置し(週2回)、介護職員と協同して入居者様の健康管理を行っている。また、看護師と24時間連絡が取れる体制を確保している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には必ず事業所職員が同行し、入院時サマリーやADL表等の情報を提供している。入院中も病院と連携を密にとり退院もスムーズに行えるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に「重度化した場合における指針」「看取りに関する指針」の説明を行っている。また、職員は看取りに関する勉強を年1回行っている。	「けやきグループホームに於ける看取りに関する指針」や同意書を備え、看取りを希望される方には適宜説明する用意がある。従来は法人の看護師を講師として看取りの研修をおこなっていたが現在は中止し、外部のオンライン研修を受けた職員が事業所内で伝達研修をしている。ここ1年看取り実践事例はない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に3回急変時対応の訓練を行い、急変時や事故発生時に対応できるように備えている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を年2回行っている。他部署との合同で行うため新型コロナウイルスの蔓延の為に中止になったこともある。洪水時避難確保計画を策定している。	年2回の防災訓練及び避難訓練を入居者とともにこない、実施報告書を作成し反省点を明確にしている。消防関連の設備点検業者が防災器具の使い方を教えてくれる。発電機を備え停電に対応できるようにしている。追分町の副会長が避難訓練に参加し、運営推進会議でも追分町の防災連絡網に当事業所を加え、有時に協力する意向を示されている。備蓄はあまり意識して準備していないが、湯煎するタイプの冷凍食品が2日分位ある。	安全推進委員会では事業継続計画(BCP)の作成のための協議もされているとのことですが、このところ種々の災害が多発傾向にあり、早期の完成が望まれます。また事業所が商業地域にあるため隣家が遠く、夜間の被災への備えが必要と思われます。備蓄の整備とともに夜間想定避難訓練を口頭ではなく実際に体験されるよう期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	倫理や高齢者虐待、プライバシー保護、接遇の研修を行っている。	新人研修や虐待・倫理研修の際に人権に関して学んでいる。男性入居者に対する「おとうさん」という呼び方や、日頃何気なく発する職員の言動にも注意を要することや、業務を優先して入居者の話をあと回しにする事のないように普段からチーム会議などで不適切対応を振り返っている。職員の言動が気になる場合や他の職員から耳に入った場合は当事者に事実関係を確認して自ら考えてもらうようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	コミュニケーション技術を駆使して入居者様が自身の想いなどを表出しやすいように配慮している。何気ない日常の会話から入居者様の想いを汲み取れるようにコミュニケーションを図っている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員配置に余裕を持たせることで一人一人のペースを大切に出来るようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	1回/2月訪問理美容を利用している。コロナ禍出ない時は一緒に服などを買い物に行っていた。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	基本的には完全調理済みの物を湯煎して提供している。食事作りを月に何度か設けている。コロナ禍になる前までは外食に出かけたり出前をとったりしていた。	調理済み食材の配達業者の献立を使用し、月2回は入居者の希望で自由献立とし、豚しゃぶやお好み焼きなど好きな料理を楽しみ、食材を切ったり盛り付けたり、お膳拭きなどの出来る方は職員とともにしている。地元の名店からの弁当の取り寄せやテイクアウトのマクドナルド、ピザも好評である。蒸しパンやゼリーなどのおやつ、クリスマスケーキのトッピングやハロウインのカボチャケーキなどを作って楽しんでいる。コーヒー・紅茶など飲み物の希望にも応えている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養管理は食材提供者者に依存しているが、食事量や水分量など細かく記録し、一人一人に応じた支援をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアをしている。必要時には協力歯科医院へ相談したり訪問診療をうけている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	毎日排泄記録を付け、排泄のリズムを把握している。適宜、排泄誘導や排泄介助をおこなっている。	自立の1名以外は紙パンツやオムツなどの排泄用品を使用しているが、出来るだけトイレで排泄できるよう支援している。昼だけフロアのトイレを使用し、夜は転倒リスクに配慮してポータブルトイレ使用の方もおられる。入院されて排泄レベルが落ちた方もなかなか入院前に戻るの難しい現状がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の記録を付け、運動や水分摂取を行い便秘の予防をしている。また、主治医と連携し下剤などの調整を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週に2~3回入浴しており、入居者様の状態に合わせて入浴日や入浴時間の調整を行っている。	1日4人位の方が主に午前中に入浴されている。好みのシャンプーも使えるが、現在は全員事業所のものを使用されている。浴槽出入りの困難な方には二人介助で対応し、シャワー浴のみを好む方の希望にも浴っている。敏感肌の方に配慮しながら柚子風呂や時々入浴剤を使用して気分を変え、職員とゆっくり話す機会を持てるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室の温度、湿度管理を行い、安眠できる環境を整えている。他にも照明や家具の位置なども、入居者様の希望や安全に配慮して設置している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医療情報ファイルに、全ての職員がわかるように、薬の種類、副作用、服薬方法などが記載されている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみやお盆拭き、食材の盛り付け、花の水やりなど、生活の中で役割を持って過ごされている。コロナ禍になるまでは買い物やドライブ、屋外レクリエーションなどを実施していた。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍までは買い物に行ったり、動物園や水族館に出かけていた。最近はドライブで車の中から景色を楽しむことしかできていない。	以前は龍穩寺、神蔵寺など紅葉の名所を尋ねたりしたが、コロナ禍により密を避け、近場のコスモス園、平の沢池、八木方面などに車中ドライブをして、他に人がいなければちょっと車から降りたりしている。外気浴を兼ねて屋上庭園のプランターで栽培している花や野菜を見に行き、東屋で地域の名店の弁当を取り寄せて食べることもある。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は基本的に施設で行っているが、本人が希望した者は職員が代わりに買い物に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	個人あての手紙、贈り物はすべて入居者様に直接お渡ししています。返事やお礼の手紙を出すための支援をしています。電話も希望があれば取り次いでいます。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の飾りを制作し季節感を持てるようにしている。照明も軟らかい色合いの物を使用している。	東、南の両窓からの光でリビングは明るく清潔感がある。玄関を入ってすぐ目に入るボードには入居者と職員合作の大きな桜の木の貼り絵や春をイメージした寄贈の折紙アートの大作が季節を告げている。玄関や家族控室横の格子戸や廊下の腰板、床の木目には和の落ち着きがあり、リビングの1段高い畳スペースには本格的なひな段飾りが飾られ、フロアの所々に観葉植物が置かれている。ソファでの寛ぎや、好きな動物のビデオ鑑賞、居眠りなど、入居者は思い思いのスタイルでゆったり過ごされている。窓は常時少し開け、1時間ごとに全開して換気している。加湿機付き空気清浄機やオゾン発生器などを備え、事業所内の保清・除菌に努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファコーナー、畳コーナー等を利用し、入居者様同士が適切な距離を保てるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅から使い慣れた家具などを持ち込んでもらっても良い。家族の写真や元気な時作った作品などを飾っている。	布を張り合わせて職員と作った表札や扉横の小ケースに並ぶ馴染みの小物で自室を分かりやすくしている。室内にはクローゼットや電動ベッド等が予め備わり、自宅の頃と同じく慣れた側から昇降ができる様にベッドの配置を工夫している。ソファ・チェスト・神棚などを持ち込みそれぞれの望む配置や暮らし方をされている。掃除はほとんどの方が職員とともにおこなうが、自分でされる方もおられる。近隣の建物とは間隔が空き、窓からの採光も良い。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自室がわかる工夫として居室の入り口にそれぞれの入居者様の持ち物を飾る棚が設置してある。トイレまでの道順がわかるように工夫してある。		